

一 輪 車

(水滸傳の地理、三)

如 舟 老 人

西洋交通以前の日本の文物は大陸から輸入されたものが普通であるから、朝鮮支那へ旅行してその日常生活に使用する器具で共通なものが多いのは不思議はない。古い發掘素燒土器中にもあり佛前の供物を盛る漆器にも見る高坏タカツキが圖們江上流の朝鮮人家に宿泊した時に自分の前に置かれ、神前に御酒を供へる時に盛る濶口の錫瓶が支那料理屋で出て來るなど、何れも古代の日本の生活に戻つた様な一種の氣分の興らざるを得ぬものである。

然るに對岸の大陸に今盛に使用されるものの幅の狭く長い太い材木を引切る鋸と北支那の狭い道路に最も重寶な一輪車とは全く日本に之を

見ぬのを久しく不思議に感じてゐた。此の如き歐亞共通の長鋸は夢窓國師が造つた庭園の残つた甲斐鹽山の堂宇上棟の時から保存されたもの一本を見た外に未だ發見せず、又た一輪車も讃岐の高松丸龜間の國分附近の田園に使用されてゐるのを發見し、藝防國境に近い周防の側にもあることを知つた位で、一輪車は何故か一度隋唐交通時代に輸入されながら一般に利用されずにつつたらしい。尤も山陽道の側では一輪車の梶棒が高く上向に反つたものと同じ形式の二輪車に變つたらしき道路の幅廣くなると共に發達改良されたらしく感ぜられた。

此の如く日本内地に容易に見當らぬものが出て來るから、水滸傳の如き大陸文學を翻譯せんと試みた文學者等は随分困つて終に分らなな場合がある。

水滸傳で百八人の好漢が梁山泊に集る動機として最も重要な場面は第十五回楊志押送金銀擔、吳用智取生辰綱の一齣で、楊志が大名府梁中書が蔡太師の生辰を祝ふ贈物を護送して、六

月初四日といふ北支那で日射最も強い眞晝中に黄泥岡の森林ある物騒な處に來て柳樹の陰に休息し、向ふ側の松林に人影を認めて怪しいと睥睨で來て見る處に

只見松林裏、一字兒擺着七輛江州車兒、六個人脫得赤條條的、在那裏乘涼……

といふ一節がある。馬琴には此の江州車がどんなものか分らなかつたらしく、「唯七輛車を排並はなはだべて」と譯してゐる。この江州車といふものは「辭源」に「稗編」を引いて孔明が發明したといふ木牛流馬の流馬に相當し木牛は小車の前轅あるもの、流馬は即ち今の獨りで推すもので、民間では之を江州車子といふとして、後漢に巴蜀に江州縣といふ處があるから此處で孔明が始めて、作つたので江州車の名が起つたのでないかと考證してゐる。

此の説明によつてその手推し一輪車 Wheelbarrow なることは明かで、我々山東の七月炎天の旅行中に幾十臺の一輪車が一行を成し、風向が好ければ青い上衣を脱いでそれを帆に張つて

鼻歌などを金切り聲で歌ひつゝ推して來る光景を目撃したものは日本に於て全く想像されぬ氣分の横溢するを覺えざるを得ぬ。但し此の山東一輪車は先が細く尖つてA字形になつた車臺の前方に偏つて車輪を着け荷物を輪の突起して隔てた兩側に載せAの脚端に相當する轆を腕を張つて握つて後から推すのである。時々は老夫婦などが此の兩側に相乗りして來るなども面白い。

然れども我々が一輪車を聯想する毎に戰慄するのは明治三十五年拳匪亂後二年の夏に濟南城東關で列を成して出て來るのと出會つて城門で我々の馬車の立往生したことで、此の如き一輪車に二つづゝ虎疫屍體を積んでゐて、屍體と我々の顔面との間を無數の蒼蠅が去來した時には生きた心地がなかつた。城中で一輪車が倒れて馬腹に當つたので馬が驚いて轡を並べた馬上から、兩馬の間にズリ落され、クリノメートルに隣馬の蹄が當つたので肋骨を折る危險を免れた經驗も今尙ほ想ひ出すごとにゾットする。